

「雨障」と「雨乍見」

川村, 幸次郎

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

28

(開始ページ / Start Page)

8

(終了ページ / End Page)

17

(発行年 / Year)

1983-07-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019360>

「雨障」と「雨乍見」

一、はじめに

万葉集に次のような歌がある。(引用は校本万葉集)

(イ) 雨障アマサハリ 常為公者ツネニキミ 久堅乃ヒサカタノ 昨夜雨爾ヨレハアメニ 将懲鴨ヨリニケンカモ (4・五一九)

(ロ) 久堅乃ヒサカタノ 雨毛落糠アメモ フラスカ 雨乍見アマツツミ 於君副而キミニタクヒテ 此日令晚コノヒクラセン (4・五二〇)

(ハ) 此間在而ココニアリテ 春日也何処カスカヤイソコ 雨障アマサハリ 出而不行者イテ、ユカネハ 恋乍曾乎流コヒツツソフ (8)

(ニ) 笠無登カサナシト 人爾者言手ヒトニコハイヒテ 雨乍見アマツツミ 留之君我トマリシキミガ 容儀志所念スカタシソオモフ (11・二六八四)

これらの歌の中の「雨障」の訓義について再検討し、「雨障」「雨乍見」両者に対する従来の解釈の中の呪的な面について考察してみたい。即ちこれらが果して恭慎の意から生じた行為であるかどうか、を確かめてみようと思うのである。

「雨乍見」は(ロ)(ニ)の両例とも「あまつつみ」と読まれて来たこと

川村幸次郎

については、異義をさしはさむ余地はなく、諸注釈書すべてが軌を一にしている。しかるに(イ)(ロ)の「雨障」は引例のように「あまさはり」と訓ずるもののみではなく、「あまつつみ」と読む注釈書がかなりある。

意味についても「雨にさまたげられて家に閉じ籠ること」とする系列と「雨を恐れ慎しむこと」と呪的に解釈するグループとがある。

以上のような概観を踏まえて比較検討し、他の歌をも参照しつつ筆者の考えを述べて大方の御批正を戴こうと思う。

二、「雨障」の訓の現状

「雨障」の訓に「あまさはり」と「あまつつみ」の二つがあることは前項でも指摘した。^{注1}手もとの注釈書等によると次のようである。

A・「あまさはり」と読むもの

万葉代匠記・万葉集攷證・万葉拾穂抄・万葉集目安補正(但し巻四

の注のみ)・校本万葉集・万葉集全註釈・萬葉集私注・新訓万葉集(岩波)・角川文庫萬葉集・万葉辞典(佐佐木)

B・「あまつつみ」と訓むもの

万葉集古義・万葉集管見(巻四の注のみ)・万葉集注釈・日本古典文学全集本萬葉集・塙書房刊萬葉集・桜風社刊萬葉集・講談社文庫萬葉集・時代別国語大辞典上代編

以上のように二つの系統が拮抗しているがこのように截然と読み分けず、(イ)の歌では「あまつつみ」と読みながら一方(ハ)の歌では同じ「雨障」を「あまさはり」と読むという曖昧な態度をとっているものもある。例を挙げれば万葉集略解・日本古典文学大系本萬葉集・日本古典全書本萬葉集・新校万葉集などである。これは(イ)の例歌の「雨障」を、後接の(ロ)の歌の「雨乍見」にひかれて「あまつつみ」と訓み、(ハ)の「雨障」は本来の字訓通り「あまさはり」と読んだからの結果であろう。

岩波古語辞典も、「あまさはり」の項で「雨障」と明記してはいるが、「あまつつみ」とも読まれると付記し、「あまつつみ」の項も立てて「雨障み」と並記した上で「へあまさはり」とも」と付記している。どちらに読んでもよいとの態度である。時代別国語大辞典上代編では「あまさはり」の項は立てず「あまつつみ」の項目の中で「別訓あまさはり」と注記しているから、「あまつつみ」にウエートを置いているように思われる。そのことは「しかしアマサハリという仮名書き例はなく、かえって例歌に接して『後人追同歌一首』という題詞の『ひさかたの雨もふらぬか雨乍見君にたくひてこの日暮らさむ』(万・五二〇)があり、その『後人』がアマツツミと訓ん

でいたことは明らかである。」と述べていることから判断できよう。このように(イ)の歌即ち五一九番歌の「雨障」を、後接の(ロ)の歌即ち五二〇番歌の「雨乍見」に引寄せて訓むべしと明言しているものには、他に澤瀉氏の萬葉集注釈がある。

三、「雨障」は「あまさはり」

前項で、「雨障」の従来の訓について概観して来たのであるが、「あまさはり」「あまつつみ」の両論が拮抗し、或は折衷的に片や「あまつつみ」と読み他の一方を「あまさはり」と読むというのが現状で定説化していない。しかし筆者としては二首の例とも「あまさはり」と訓むべきであると思う。以下その理由を述べることにする。

先づ、集中の「障」字の訓を調べることから始めよう。当面の「雨障」以外の「障」字の使用例を列挙すると次の通りである。(●印は筆者)

- (1) 一瀬二波 千遍障良比 逝水之 後毛将相 今爾不有十方 (4・六九九)
- (2) 足千根乃 母爾障良波 無用 伊麻思毛我毛 事應成 (11・二五二七)
- (3) 他言者 真言痛 成友 彼所将障 吾爾不有国 (12・二八八六)
- (4) 湊入之 葦別小舟 障多見 吾念公爾 不相頃者鴨 (11・二七四五)
- (5) 湊入之 葦別小船 障多 今来吾乎 不通跡念莫 (12・二

九九八)

(6) 湊入爾 蘆別小船 障多 君爾不相而 年曾經來 (12・二)

九九八の或本歌)

(7) 紀伊国之 室之江辺爾 千年爾 障事無 萬世爾 如是將在

登…… (13・三三〇二)

(8) 早敷哉 誰障鴨 玉梓 路見遺 公不來座 (11・二三八〇)

(9) ……左之麻久流 情不障 後代乃 可多利都具部久 名乎多

都倍志母 (19・四一六四)

(10) 水底之 玉障清 可見裳 照月夜鴨 夜之深去者 (7・一〇

八二)

(11) ……數數毛 見放武八萬雄 情無 雲乃 障障倍之也 (1・

一七)

(12) 奥藻 障浪 五百重浪 千重數數 恋度鴨 (11・二四三七)

(13) 角鄣經 石見之海乃 言佐徹久 辛乃埒有 …… (2・一三五)

(14) 角障經 石村毛不過 泊瀬山 何時毛將超 夜者深去通都

(3・二八二)

(15) 角障經 石村之道乎 朝不離 將婦人乃 …… (3・四二二三)

(16) ……朝裳吉 城於道從 角障經 石村乎見乍 神葬 葬奉者

…… (13・三三二四)

(17) 鳥音之 所聞海爾 高山麻 障所為而 奥藻麻 枕所為而 …… (13・三三三六)

以上の十七例 (引用||校本萬葉集) を得たのであるが、校本萬葉集を始め手元の十余種の注釈書等に当たってみても、これらの「障」を「つつみ」と訓じているものは一つもない。いずれも「さはふ」と

か「さはふ」の系列で読んでいる。只一首(7)の例のみが「へだて」と訓まれているが、これとて「つつみ」の系列ではない。

多少ニユアンスを変えて訓じている注釈書もあるが、総体的には校本万葉集の訓と大同小異である。念の為にその小異を指摘してみるが次の程度である。(2)例の「サハラハ」を私注と古典大系本萬葉集では「さやらば」(小異部の●印は筆者)とし、(7)の例歌の「サルコトナク」を私注は「さやることなく」と訓じている。(8)の歌の「サヘテカモ」を古典大系本や新校萬葉集および桜風社刊萬葉集は「さふれかも」と読み、一方埒書房刊萬葉集では「さはれかも」と訓じている。尚(9)の例歌の「サハラ」は代匠記と岩波文庫本の新訓萬葉集が同様に訓じているが、他の十種程は「さやらず」と読んでいる。さてこれらの少異は「サハリ」「サフ」の枠内のことで、当面の「アマサハリ」の論証を妨げるものではない。「障」なる字は「ツツミ」ではなくて「サハリ」と読むべきことの資料であることに変わりはない。

如上の用字例から考えると、万葉集の中で「障」を「つつみ」と読むのは無理と思われる。従って当面の「雨障」は「あまざはり」と読むべきであって「あまつつみ」と訓ずるのは如何かと思うのである。類聚名義抄では「障」には「ツ、ム」という訓も挙げているではないかと指摘する向もあるが、同書は平安末期の編纂であるから確たる論拠にはなるまい。

第二に「あまつつみ」派の強調する「雨乍見」との関連について一考しておこう。なる程(1)と(17)の両首はペアをなしているのであるから、後接する歌に「雨乍見」という紛れもなく「あまつつみ」と

訓すべき用例がある以上、同義語と思われる「雨障」も「あまつつみ」と読むべきであるというのにも一理はある。

しかし、対とか類とか組とかいうものは必ずしも同質のものに限られない。黒と白・右と左・東と西・男と女などというように、むしろ異質のものがペアをなすのではなからうか。勿論、色彩とか方向とか人間とかいう範囲内でのことではあるが。

当面の「雨障」と「雨乍見」も、雨に降り籠められて家に閉じ籠るといふ同様な情況の形象なのに、異なる用字を使っているのであるから、何がしかの相違があるろう。後述の意味論でも触れるが、「雨障」には雨に妨げられて家に籠るといふ受身のニュアンスがあるのに対して、「雨乍見」には心を包むとか慎しむとかの自己をコントロールするアクティブなニュアンスがあるろう。そういう意識が用字に表れたのだと思う。むしろ使い分けたのだと思うのである。無理して同一に読む必要はない。片や「あまざはり」片や「あまつつみ」で立派に対をなす。

尚(イ)両首の場合文脈上(イ)の「雨障」は名詞として使われているのに対して、(ロ)の「雨乍見」は動詞として機能している。ここにも使い分けがあったように見受けられる。

「雨障」「雨乍見」と同じような意味を持つ「雨隠」という用語も万葉集にはある。これはより一層「雨に降り籠められる」という内実を端的に表現している。

- (ホ) 雨隠 三笠乃山乎 高御香裳 月乃不出来 夜者更降管 (6)
- ・九八〇
- (ク) 雨隠 情鬱悒 出見者 春日山者 色付二家利 (8・一五六)

八)

(ト) 安麻其毛理 毛能母布等伎尔 保等登芸須 和我須武佐乃尔
伎奈伎等余母須 (15・三七八二)

右の三首(引用||桜風社刊萬葉集)がその例である。(ホ)の例は枕詞としてであり新校萬葉集や講談社文庫本は「あまごもる」と小異を示してはいるが、諸本皆「あまごもり」と訓じている。(ク)の「雨隠」、管見ではすべての注釈書が「あまごもり」と読んでいる。(ト)の例は一目瞭然で補説するまでもない。

このように見えてくると「雨に降り籠められること」を「雨障」「雨乍見」「雨隠」と三様に表現したのだということがわからう。何も無理して「雨障」を「あまつつみ」と読ませる必要はなからう。前述したように、むしろ使い分けられるだけのニュアンスの違いをも持たせた表現ではなかったのか。

因みに言及すると、現在でも「目障り」とか「耳障り」とかいう言葉が使われているではないか。「目つつみ」「耳つつみ」などとは言わない。

以上のように検討してみても、筆者は「雨障」を「あまざはり」と読むべきであると主張するのである。

四、「雨障」「雨乍見」の意義

前項までの検討を踏まえ、以下「あまざはり」「あまつつみ」の意義について考察してみよう。始めに両者に対する注釈書や辞書の解釈を、手元の資料で概観しておこう。但し「雨障」を「あまつつみ」と訓じているものは「雨乍見」の部類に入れることとした。

(1)「あまざはり」の意義

○萬葉代匠記(初)―雨にさはりてこぬなり。

○萬葉集目安補正―雨にさへられ、公私共に怠る也。

○萬葉集拾穂抄―雨をいとふ……。

○萬葉集攷證―雨にさはりて出ざるをいふ。

○萬葉集略解―雨に憚りて家を出ぬをいふ。

○萬葉集私注―雨に妨げられて引き籠ること。次の歌にアマヅツミとあるのと同じ。

○萬葉集全註釈―雨による障害。風を引いたりすること。

○角川文庫萬葉集―雨の為に健康を害すること(五一九番歌の脚注)―雨に妨げられてあること。(一五七〇の注)

○広辞苑―雨に妨げられること。

○岩波古語辞典―雨にさまたげられること。雨の為に外出できないこと。「あまつつみ」とも。

○萬葉辞典―雨にさまたげられて家に籠って居ること。

(2)「あまつつみ」の意義

○代匠記(精)〈再出書名なので略記する。〉(以下同様)―雨ヲ慎シムナリ。

○攷證―雨を恐れ慎しむ意なり。また旅の歌につゝみなく、つゝむことなくなどいへるつゝみも、元はこれと一つ言にて、慎しみ恐るゝ事なくといへる意……。

○古義―雨忌して家内に隠り居るを云。

○略解―雨づゝしみの略。

○拾穂抄―雨怖れ也。雨をつゝしむ也。

○全註釈―ツツミは慎み籠ること。雨を忌んで籠る意。

○私注―雨さはりに同じ。

○注釈―雨にふられてとぢ籠られる。雨に障さへられて出ずに(をられるあなた)

○古典文学大系本―雨ごもり。

○古典文学全書本―雨をはばかって引きこもってあること。

○古典文学全集本―雨ごもり。雨に降りこめられる……。

○角川文庫本―雨に閉じ籠ること。

○時代別国語大辞典―雨にさえぎられて家にとじこもっていること。「考」別訓アマサハリ。

○大言海―雨ニ降りコメラレ、家ニ隠リ居ルコト。

○広辞苑―あまざわりに同じ。

○岩波古語―雨に降られて家にとじこもっていること。「あまざはり」とも。

○万葉辞典―萬葉考に「雨をかしこみ慎むなり」とある。単に雨に降りこめられてあるのみでなくて、信仰的の意をおびたものか。

以上の通りである。これらを整理すると、

①雨に妨げられて家に閉じ籠ること。

②雨を憚り怖れ慎んで家にとじとしてること。

③雨による障害(風邪を引くなど)。

の三つに分類される。「雨障」を「あまざはり」と訓ずる系統の注釈書等は大部分①の意味をとっている。③は雨に妨げられる事の内容を主に取り上げたものだが、①に包含してもよいように思われ

る。なお③の意を特にあげている全註釈と角川文庫本は同じく武田祐吉の著であるから一致しているのは当然であろう。

②の説をなすものは「雨乍見」の語釈と、「雨障」を「あまつつみ」と訓ずる注釈書に多い。但し「雨乍見」をも「雨障」と同義と見なすものも幾つかあるから、截然と「雨障」は雨に妨げられて家に籠ることであり、「雨乍見」は雨を呪的に畏怖することであると言い切ることは出来ない。

しかし大体の傾向としては、「雨障」を①の意味に、「雨乍見」は②の意味であると理解してもよさそうである。つまり家に籠ることは同じなのだが、その理由に差がある。片や「雨障」は雨の障害がその理由であり、一方の「雨乍見」は雨を怖れ慎む故に家に籠るというわけである。

因みに言及すると、こうした理由づけなしに、雨の日に家に籠ることを端的に形象した言葉も、万葉集にはある。それは

雨隠 三笠乃山乎 高御香裳 月乃不出来 夜者更降管(6・

九八〇)

雨隠 情鬱悒 出見者 春日山者 色付二家利(8・一五六八)
安麻其毛理 毛能母布等伎尔 保等登芸須 和我須武佐刀尔
伎奈伎等余母須(15・三七八二)〈右三首の引用は桜風社本〉

などに見受けられる「雨隠」である。

五、「あまつつみ」は呪的か

前項で概観した「あまつつみ」の意義の中、代匠記や萬葉集攷證・古義・略解・拾穂抄・全註釈・万葉辞典などの説く、雨を呪的

に神の威力の現れとする見方に、筆者は疑義を感じる。萬葉の世紀も第三期・第四期の当時の人々が、果して呪的にそれ程雨を怖れ憚ったろうか。目下筆者はそのことに関心と疑念を抱くのである。この論稿を書こうとしたモチーフもここにある。

前掲の諸本の中の代表として萬葉辞典の説を再掲すると
萬葉考に「雨をかしこみ慎むなり」とある。単に雨に降りこめられてゐるのみでなくて、信仰的の意をおびたものか。

とあるし、折口信夫の萬葉集辞典にも

あまつつみ〔雨謹〕 あまは雨の形容詞的屈折。つつみは物の障^サ碍を避けて、ちつと籠^カつてゐる事で、雨にふりこめられて外へ出ない事を、物忌みにこもつてゐる様に言うたもの。或は古くからの習慣で、今も精進が足らなかつたと言ふ風に、罪惡觀念と雨の障^サ碍とを結びつけて考へてゐたかも知れぬ。

とある。折口信夫は如何にも民俗学者らしく、様々な民俗を必要以上に呪的に見做し勝な傾向があるので、この程度の考察は当然とも思うが、前述のように幾人もの人が「雨つつみ」を「雨を憚る」とか「雨を怖れ慎む」とかと呪的な見方をしてるのである。

しかし筆者が集中の雨に関する歌一四四首の分析をした結果の感^カ触としては、万葉人が雨をそれほど呪的に思つていなかったように思われるのである。それ程恐れおののいてはいない。衣服を濡らしたり花をあせさせたり散らしたりする雨を厭^ウうて

苦しくも 降り来る雨か 三輪の崎 狭野の渡りに 家もあら
なくに(3・二六五)

見渡せば 向ひの野辺の なでしこの 散らまく惜しも 雨な

降りそね (10・一九七〇)

(書き下しの引用は小学館古典文学全集本。以下同じ)

などという類の歌を何十と詠じてはいるが、雨を畏怖している歌は見受けられない。

むしろ

山吹の 咲きたる野辺の つぼすみれ この春の雨に 盛りなりけり (8・一四四四)

ひさかたの 雨も降らぬか 蓮葉に 溜まれる水の 玉に似た

る見む (16・三八三七)

九月の しぐれの雨に 濡れ通り 春日の山は 色付きにけり

(10・二二八〇)

などの如く雨に好感を寄せたり希求したりしている。一步進んでは雨をもっけの幸いとさえしているように感じられる歌も沢山ある。

第一当面歌

ひさかたの 雨も降らぬか 雨つつみ 君にたくひて この日

暮らさむ (4・五二〇)

の「雨つつみ」は「君にたくひて」暮らそうとする、歓迎すべきものとされているではないか。だから「雨も降らぬか」と願望しているのである。どこに雨を嫌っている気配があるう。況んや神の怒りとして畏怖するなどということが。真に呪的に怖れ戦くのだったら「君にたくひて」などと見えようか。愛人と一緒に居たいからかなどというのは、この際神への冒瀆となるう。不謹慎であろう。慎しみなどでは更々ない。こうした感触は次の歌々からも感じ取れよう。

ひさかたの 雨は降りしけ 思ふ児が やどに今夜は 明かし
て行かむ (6・一〇四〇)

妹が門 行き過ぎかねつ ひさかたの 雨も降らぬか そをよ
しにせむ (11・二六八五)

雨も降る 夜もふけにけり 今更に 君去なめやも 紐解き設
けな (12・三一二四)

鳴る神の しましとよもし さし曇り 雨も降らぬか 君を留
めむ (11・二五二三)

韓衣 君に打ち着せ 見まく欲り 恋ひぞ暮らしし 雨の降る
日を (11・二六八二)

「思ふ児がやどに今夜は明かして」行きたいから「雨は降りしけ」とか、妹が家に留る理由にしたいから「雨も降らぬか」ということがどうして呪的であろうか。慎みの籠りだったら「紐解き設けな」などとは発想されないのであろう。若し呪的な雨籠りだったらこのような発想は皆タブーの筈である。右の歌々にはそうした禁忌のニュアンスは塵ほどもない。いづれも雨を歓迎している。

大野らに 小雨降りしく 木の下に よりより寄り来 我が思
ふ人 (11・二四七七)

この歌では、家に籠るのではなく木陰への雨宿りを詠じているのであるが、小雨の降りしくのをもっけの幸いとして思い人を誘うという趣旨を感じ取れよう。降ったり止んだりする雨でしば／＼木の下へ逃げ込んだ、日常の経験を譬喩としたのであるう。その苦い経験を軽妙な愛の歌に転換している。雨を畏怖するところからでは発想されない美学である。

こうした雨籠りの実状をあざやかに形象しているのが、同じく当
面の問題点「雨つつみ」を詠じた次の歌である。

笠なみと 人には言ひて 雨つつみ 留まりし君が 姿し思ほ
ゆ (11・二六八四)

「笠なみと人には言ひて雨つつみ」これが雨つつみの実質である
う。雨に濡れるのが嫌だから家に籠るのであるう。現在にも通ずる
理由である。ましてやまともな雨具とてなかった古代にあっては、
雨の降る日に出歩くのは並大抵のことではなかった筈である。しか
も武田祐吉の説によれば

雨の降るのを難儀とするのは、当時の衣服が、雨に湛えないか
らであって、濡れることを極度に嫌ったのである。それが雨ザ
ハリ。雨ヅツミの如き特殊語の発生の要因となっている。^{注2}

ということである。一度雨に会ったらにじんだり落ちてしまいうよう
な染料だったのであるう。多くは草摺^{くますり}だったから。

紅^{くれなゐ}に 染めてし衣 雨降りて にほひはすとも うつろはめ
やも (16・三八七七)

この歌で紅花^{べにばな}染を特に言挙げているのは、このように雨に会って
も褪^あせるどころか、却って後世の藍染のように洗われた方が色濃く
なるからであろう。しかしそれは当時としては稀にみることであ
たから言挙げしたのであって、一般の草摺はすぐに色褪せたのであ
ろう。右の歌はそのことを言外に示しているのである。だから次の
ようにも歌われるのである。

通すべく 雨はな降りそ 我妹子^{わがもこ}が 形見の衣 我下に着^けり
(7・一〇九二)

楽浪^{さきなみ}の 連庫山^{ななくら}に 雲居れば 雨ぞ降るちふ 帰り来我^こが背

(7・一一七〇)
春の雨に ありけるものを 立ち隠^{かく}り 妹^{いも}が家道^{いへぢ}に この日暮
らしつ (10・一八七七)

春雨^{はるさめ}に 衣はいたく通らめや 七日し降らば 七日来^こじとや
(10・一九一七)

ひさかたの 雨の降る日を ただひとり 山辺に居れば いぶ
せかりけり (4・七六九)

心なき 雨にもあるか 人目守り ともしき妹に 今日だに逢
はむを (12・三一二二)

梅の花 散らす春雨 いたく降る 旅にや君が 慮^{おぼ}りせるらむ
(10・一九一八)

これらの歌には、雨に衣服の濡れることを厭う気持がよく現れて
いよう。しとくと降る春雨でさえ七日も籠^こったり、木陰に隠れた
り、降り出す前に引き返して来なさいと呼びかけたりしている。そ
れはなにも雨を神威として恐れ慎むのではなく、衣服などの濡れる
ことや風邪を引いたりする物理的障碍を避けようとしてのことであ
ろう。

以上のように雨に濡れることを、古代人は非常に厭ったものではあ
るが、人を深く愛するようになると、その困難に敢然と挑戦したの
である。敢て雨に濡れそぼちながら逢いに行くのである。次の歌々
がそれを証して余りあるう。

ただひとり 寝れど寝かねて 白たへの 袖を笠に着 濡れつ
つぞ来^こし (12・三一二三)

ひさかたの 雨の降る日を 我が門に 蓑笠着ずて 来る人や
誰 (12・三一二五)

巻向の 穴師の山に 雲居つつ 雨は降れども 濡れつつぞ来
し (12・三一二六)

わが背子が 使ひを待つと 笠も着ず 出でつつぞ見し 雨の
降らるに (11・二六八一)

玉だすき かけぬ時なき 我が恋は しぐれし降らば 濡れつ
つも行かむ (10・二二三六)

めづらしき 人に見せむと もみぢ葉を 手折りぞ我が来し
雨の降らるに (8・一五八二)

我が背子に 恋ひてすべなみ 春雨の 降る別知らず 出でて
来しかも (10・一九一五)

我妹子が 赤裳の裾の ひづつらむ 今日こゝろの小雨に 我さへ濡
れな (7・一〇九〇)

これらの歌からどうして、雨を神威として畏怖したと感じ取れよ
うか。神は人事に超越して存在する。本来に信仰的に雨の前に慎む
ならば、思ひ人に逢いに行くなどという心をぐっと抑えて、家に閉
じ籠る筈である。雨が神の意志の現われならば、右の歌々のように
歌うことは—そういう行為は、神への挑戦となり神を冒瀆するもの
として排斥された筈である。だから前掲のような歌が沢山あること
は、当時の人々がもう既に、それほど雨を呪的に畏怖しなくなつて
いたということ、それとなく示していると思ふのである。神威で
なく物理的障碍であるからこそ、身体的には苦しくとも敢て挑戦し
得たのであろう。身体的に苦しければ苦しい程、愛の証しとしては

高度なのである。これらの歌は冒瀆などではない。相手に対する愛
の証しとして誇らかに歌い上げているのではないか。

さて、当面の二六八四番歌に論を戻そう。「笠なみ」と人に言つ
たこの男は、実は愛人のもとを去るべき時が来たのに、折からの雨
をもつての幸いとして居座りの雨ごもりをしたのである。その本音
を言うのが照れくさいので「笠なみ」ともつともらしい理由を言
げしたわけだろう。そこにユーモア性も生じ軽妙洒脱な感じさえ醸
し出されたのである。「笠なみ」とさらりと云つてのける妙味、そ
ういう男の洒脱さに相手の女性は感じ入ったのであろう。だから
「君が姿し思ほゆ」と、いつまでも臉に焼きついたのであろう。

当時すでに、このように理由を軽くはぐらかす機智を、結構楽し
んでいたのではなからうか。直接雨に関わるものではないが次の歌

あしひきの 山より出づる 月待つと 人には言ひて 妹待つ
我を (12・三〇〇二)

……さにつらふ 君が名言はば 色に出でて 人知りぬべみ
あしひきの 山より出づる 月待つと 人には言ひて 君待つ
我を (13・三二七六)

などにも同じような趣向が見受けられることなどがその証左となろ
う。

ところで「雨つつみ」が本当に呪的に雨を畏怖してのことだつた
ら、なんで「笠なみ」となどと人に告げる必要がある。笠がある
うが無からうが慎んで籠るべきなのである。

当面歌二首を再掲しよう。

ひさかたの 雨も降らぬか 雨つつみ 君にたぐひて この日

暮らさむ(4・五二〇)

笠なみと 人には言ひて 雨つつみ 留まりし君が 姿し思ほ
ゆ(11・二六八四)

右の二首をめぐって種々考察して来たのであるが、両首に出てくる「雨つつみ」は、雨を畏怖しての結果だとは思われないのである。内実はむしろ雨の障碍そのものの為で、「雨障」や「雨隠」と何らの変りもないと思うのである。

六、むすび

以上、ジグザグに廻り道をしながら、「雨障」の訓義と「雨乍見」の意義とを考察して来た。

先づ、「雨障」の訓については、主として集中の「障」の字の用例を検討することによって、「あまつつみ」と読ませることは無理であって、旧訓通り「あまざはり」と訓すべき旨を主張した。後接歌の「雨乍見」に引寄せる必要もないことを指摘した。

また「雨乍見」あまつつみの意義については、従来の説を整理し、その中の信仰説に疑義を抱き、集中の多数の関係歌から判断して反論した。即ち「雨つつみ」は所謂呪的な畏怖感からの家籠りではなく、衣服の濡れることや健康を害するという雨の障碍を避ける為のものであったと論証したのである。

勿論、「雨乍見」と造語された頃にはかなり信仰的な慎みがあったであろう。しかし、万葉の世紀も第三期・第四期ともなれば、そのような呪的観念は薄れていたと思われる。そのことも当面歌を始め幾多の歌を分析しながら論じた。

但し、慣習としては「神の崇りを怖れ慎む」などと言ひ継いだるうことは想像される。科学万能となった現代でさえ、予定行事などに雨が降ると「普段の心掛が悪いから」などと天罰めいたことが盛に言われる。誰も信じているわけではないのに、風習としては残っている。内実は薄れても習俗や用語は残る。当面の「雨乍見」もその一例だったのでなかろうか。(一九四九年卒)

注1、「あまざはり」「あまつつみ」と濁音で読む人もある。

注2、武田祐吉著『萬葉集全註釈五』八二ページ。

付記、校本萬葉集では、句と句の間をあけていないが、引用にあたっては見やすくする為に一コマずつあけた。